

## 都市史における広場

——とくにドイツについて——

矢 守 一 彦

マルクト広場はヨーロッパ中世都市における第三次産業の主要舞台であったから、小稿も強ち本号に無縁ではないが、今回の研究目標は必ずしも特集テーマにそつたものではないかも知れない。

すなわち中世都市のマルクトについては、すでに社会経済史学のあげた歴大な蓄積があるが、その殆んどはこれを都市における△空間▽の面から捉えたものではなかった。本稿もまた、当然、これら市場機構に関する研究成果をふまえてのものでなければならぬが、直接的には専ら△形態▽に問題の焦点をかざることにする。

機能分析、計量的処理に偏した近代都市計画に、機能の実体化としての△形態▽、ディザインの問題を導入したのは Le Corbusier であったが、社会経済史的方法を主潮とする歴史地理学において、いま一度、△形態▽をみなおすことも無用ではあるまい。

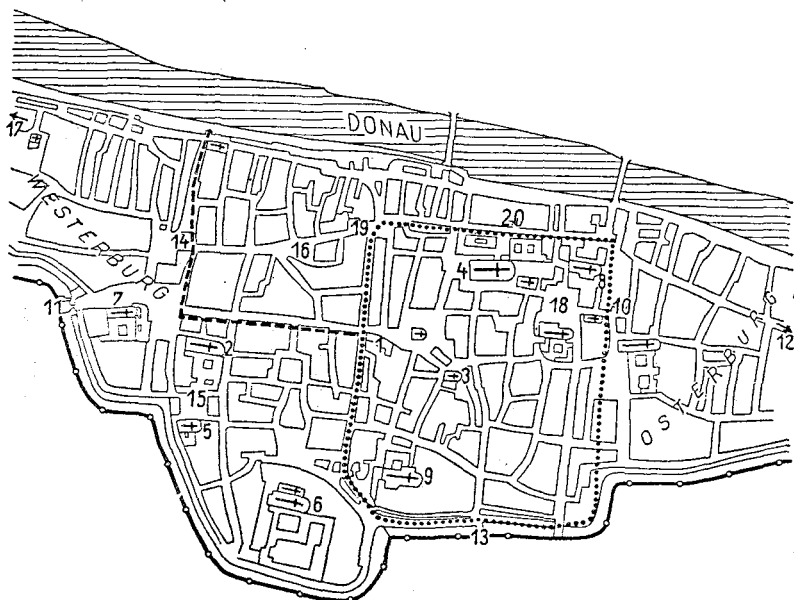
## 一 広場の変容系列と地域的類型

一般的に都市の広場を類別するには種々の観点があろうが、市場という機能を重視するなら、(A) Marktplatz

(B)その他の広場の大別をしよう。そしてこれは当面のドイツ中世都市にとっては、最も適切な類別方法であるといえる。G. Schwarz 氏の点に關し、早期の Fernhandelsmarkt, 後の Territorialstadt の Nahmarkt いずれの場合であれ、マルクトは西・中央ヨーロッパ都市の本質的な構成要素であるため、その形状には特別の重要性があり、これを中心にして都市の Grundriss 研究の体系化が試みられてきたとしている(1)。南ドイツについての R. Gradmann(2) 西北ドイツについての H. Dörries(3)の仕事はこの代表作に属する。

(B)については後に付説することにし、まず当面の課題である市場広場のみを取りあげても、これはさらに形態的にいろいろかの細類別をふまゝ、それぞれ歴史的・地域的な変容系列に照応しているごとく思われる。

〔Vicus と Wik〕 東ドイツにおけるがごとき純粋な建設都市は別として、大方の都市が Kaufmannsiedlung → Marktlecken の時期を通過せしむるとすれば、都市における市場広場の源流は Wik に求められねばならないだろう。ヴィクの一般的な形態は河岸や交易路に沿って片側だけに建物列のならばもので、無防備の場合が多かった。そしてこのようなスラック時代のヴィクは類型的にはローマン・タウンのそれに遡る(4)。しかしこれは都市の広場ということですぐ想起される Forum を祖型とするものではない。ギリシアの agora やローマのフォーラムは、元来が市場を第一義的機能としたものではなく、市のためには例えば Forum pistorium (穀物市場)、Forum piscarium (鮮魚市場) など、各都市は一個ないし数個の広場を、中央広場とは別に備えていた(5)。ヴィクは、castrum などの城門の前に発生した canabae や、これに文人などの定住地が加わることによって形成された vicus の系譜につながるものである。ヴィクスは街村状の形態にとどまったわけではなく、例えば Augsburg では、そのローマン・タウンとしての盛時、Hardian 帝の時期には、南方よりもたらされた酒・食品・織物・装飾品などを多量にあきな



**REGENSBURG.** 1 Augustiner 1308. 2 St. Blasius (Dominikaner). 3 St. Cassian 973. 4 Dom St. Peter um 700. 5 St. Egidien 1279. 6 St. Emmeram um 700. 7 St. Jacob 1293, Schottenkloster. 8 Niedermünster 1170. 9 Obermünster um 1000. 10 Schwarzes Burgtor. 11 Jacobstor. 12 Ostor. 13 Peterstor. 14 Tor Roselind. 15 Arnulfpfalz. 16 Haidplatz. 17 Herzogsburg. 18 Kaiserpfalz. 19 Kohlenmarkt. 20 Porta praetoria.

*Castra Regina, Standlager 179 n. Chr. | Civitas 795. | Pfalz 9. Jh. | Kaufleute-siedlung und Haidplatz, 917 befestigt | Kaiserpfalz Heinrichs II. 1002—24. | Stadterweiterung 1320 mit Stadthof 1322*

図1 Regensburg (H. Planitz による)

う街路と広場（おそらくは鋪石の施された）が存した。また Trier の市場の遺跡もフォーラムを思わせるような結構である。

これらローマン・タウンの殆んどが破壊されてのち、中世における交易の復活、そしてヴィクの発生・分布・機能などについては、「都市核」を扱う別報にゆずるが、その立地点のうち、主要なものの一つはかつてのローマン・タウンの城郭の門前であった。

Strasburg の市場広場はローマの castellum の外壁に接した地点に設営されたヴィクの位置を襲っているし、Regensburg の市場広場も civitas の門前、これとドナ

ウ川との中間位置を占めている<sup>(1)</sup> (図1)。Mainz, Bonn, Passau などいずれもこれに従う。Köln の場合も同様にヴィクはキヴィタスの東壁とライン川との中間に発生し、これがのちに Rheinvorstadt となり Heumarkt を生んだ<sup>(2)</sup>。

マルクトの形態が、河岸や道路に沿う片側町に発し、これが Straßenmarkt として Marktplatz へという変容系列をたどったことはもはや定説としてよいであろうが<sup>(3)</sup>、こうした一般的趨勢にもかかわらず、ながく Straßenmarkt の形態を維持したものであること、また変容の仕方やマルクト広場自体にも、いくつかの類型の見出せること等について、なお若干の整理を加えておきたい。

〔Straßenmarkt〕 Straßenmarkt の卓越する地域は北西ドイツと南ドイツである。北西ドイツでは Fernstraßen や Hauptstraßen (Hauptdurchgangsstraßen) が Marktverkehr に供された<sup>(4)</sup>。Utersen, Hitzacher, Blekede, Dannenburg, Husum, Otterndorf など、いずれも Hauptstr. の一部が拡張されて市場になっている例である<sup>(5)</sup>。しかし地域的類型としてより著しいのは南ドイツであり、Konstanz 湖畔の Radolfzell は記録に残る最古の例(一〇〇)である<sup>(6)</sup>。ここに Bayern では “breitgeschlossenen Einstraßenmarkt” の形態が幾世紀にわたって保持されている<sup>(7)</sup>。“geschlossenen” といわれるのは密に建てこんだ建物によって囲まれている形状を指したもので、集落のうち、他の疎で不規則な部分に対して異様にうごめるほど幾何学的な形に広げられ、周囲が固められている。もともとその面積は Flecken クラスでは Berechnungsgraden 一・五平方キロ、Graz 〇・一平方キロ、Stadanhof 〇・三平方キロという程度であるが<sup>(8)</sup>。Duderstadt, Nutzig, Obernheim, Offenburg, Riedlingen など、も Straßenmarkt の部分は、通常の街道の幅員とは明瞭な境界をなしているのが看取される<sup>(9)</sup>。

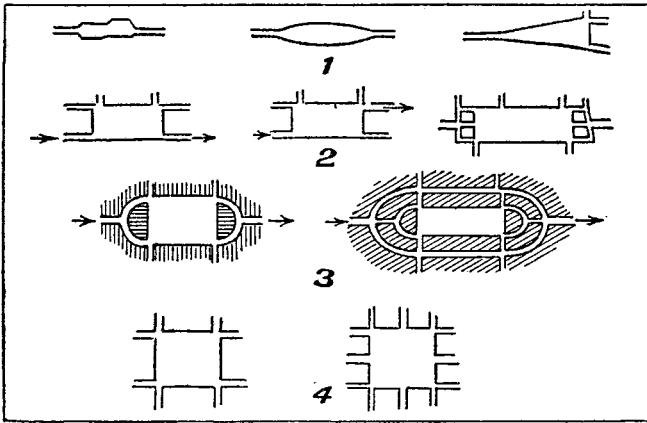


図2 街路パターンとマルクト (R.E.Dickinson による)

上記の地域以外でも、R.Martiny のいわゆる「中央路都市」(後述)に属するものでは、しばしばこれが拡張されて Straßenmarkt を形成するが、Bayern に次いで卓越地域は Oberschwäben や Augsburg, Kaufbeuren, Biberach, Heidenheim, Ravensburg, Lindau, Waldshut など

の例は著しく多い(19)。

市場のために特別な位置と空間とを用意しようとする動きは、十二世紀以来あらわとなり、Straßenmarkt は小さい都市では全 Grundriss を規制するものであったから、これが中央位置を占めるよう、全 Straßenetz を顧慮しながら設定された(20)。十三世紀には、その計画性はいよいよ著しくなって、上記のように Hauptstr. の一部または全部の拡張(21)から、これに接して広場を設けること、さらに独立した整形の市場広場を求める方向に流れていく(22)。こうして建設都市や新市区の場合のもとより、古い都市でも新しい方形のマルクトの新・改築がさかんとした。

このためマルクトの形態変化の整理も、街路パターンや全 Grundriss と関連づけて行なわれる必要がある。

〔街路パターンとマルクトの形態〕 図2は R. E. Dickinson による標記の関係を示す模式図であるが、一方、R. Martiny は街路パター

ンによる都市類型を①中央路都市、②十字街道都市、③羽状都市、④並行路都市、⑤格子状都市に分け、これと広場との関係にもふれている(28)。

⑥は西南ドイツに卓越する型であり、一般にマルクト広場を欠くものが多いが(24)、西北ドイツの Buxtehude, Ulzen(25), Baden の Villingen(26)のように Hauptstr. の交会部分を Straßenmarkt としている例もみられる。

さうして図2の第2段階にいたる前段階として Hauptstr. に接してマルクト広場を造出する形態がある。ハインリヒ獅子王の Residenz, München において十二世紀中頃につくられた Hauptache と、この傍にひろげられた Marienplatz は、このタイプの祖型といわれ、同じ原理が二〇年のちに Hann. Münden にも受容された(27)。また Braunschweig の Hagen 地区のそれもこのタイプに属し、ハルツ諸都市の範となった。その他 Rothenburg, Heilbronn などが代表的な事例である(28)。

右の型において、マルクト広場の四辺のうち、Hauptstr. に接しない一辺にも、これに沿う街路が発生するか、Hauptstr. に並行する街路に達するまで広場が拡張されれば、それは結果的に図2の第2に異ならないが、第2は計画的に平行する二本の街路間の一ブロックが広場のために用意されたもので、十三世紀にはすでに珍しくはなかった。Nürnberg の Große Markt, Dresden や Oldelose のマルクトなどがこの例であり(29)、R. Martiny のいわゆる並行路都市でも、容易にこの型のマルクト広場が生じ得た(30)。やうに Rinteln, Stadt-Ilm, Sorau のように三〇の並行街路にわたってはめこまれた場合もあった。これがより整えられた Hildesheim の Neustadt や Rathenow などのそれは、Martiny の③の移行型とみなすことができる(31)。

こうして計画的に建設あるいは拡張された都市では、当初から広い方形のマルクト広場が設定され、また従来は全

Grundris の中で、マルクト広場が偏心的に位置していた都市でも、これを中心部に移動させ、Oldenburg のように、新しいマルクト広場に接する新しい定住地の発達する場合もまれではなかった<sup>(32)</sup>。

⑥にもその中心部に例えば Isny のごとくマルクト広場を生ずるものがあり、この場合は⑤+中央広場と類似してくるが、前者においては主軸路のみの直交であって、他の街路には間隔・走行ともに規則性が認められないのに対し、後者は正しく方格状町割のなかの一ノ二ブロックがマルクトにあてられている点で異なると、R. Martiny は指摘している<sup>(33)</sup>。

⑦の Gitternetz の中央にマルクト広場をはめこむ様式は、Ostbayern 以上に農民的な近地交易を主要機能としており<sup>(34)</sup>、都市全体を一つの Zentrum にひきよせ、かつ偏った方向への拡張を防ぐなどの利点をもつが、他方、平坦という地形的条件を必須の前提とする欠点もある<sup>(34)</sup>。——このパターンがエルベ以東の全き植民建設都市において典型的に展開した所以である。

もっとも東方植民地域においても、都市プランは一樣であったわけではない。ほぼ方形のマルクト広場をもつ Neubrandenburg とへに Mecklenburg, Pommern, Westpreußen の型と、Rundform に中央マルクトがとり入れられた Breslau や Schlesien の型の二大別があり、H. Planitz は後者においてマルクト広場の中心立地はその極相に達したとみている<sup>(35)</sup>。また一方、バルト海岸の Danzig, Elbing, Königsberg などでは Wesser 川に沿うひろい Strassenmarkt の型を示した<sup>(36)</sup>。

ところで⑧中央広場プランの分布は東ドイツに限られるものではないが、南・西・北ドイツにはその事例数も少なく、かつ必ずしもこの様式が厳密に貫かれていない。その中において比較的多いのは Hessen (Melsungen,

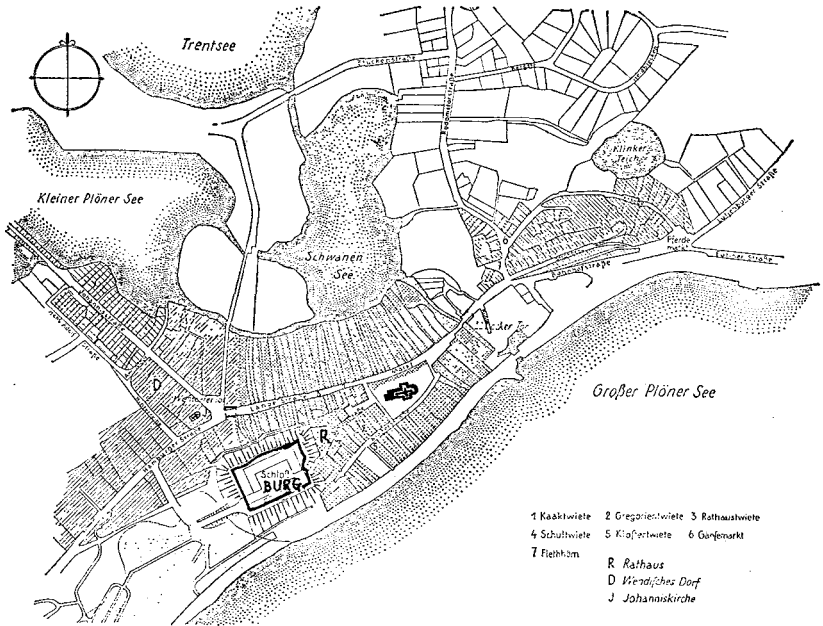


図3 Plön (E.Keyserによる)

Witzenhausen などを、Thüringen (Freiburg a.d. Unstrut), Sachsen の南東 (Neuhandensleben, Wenigerode, Hameln, Holzminden, Göttingen) など中ドイツで、東北ドイツの卓越地域へと移行する。このプランの源流を、フォーラムとの類似から南ヨーロッパに求めようとする者もあるが、上記のような西南↓東北という分布および正確さの密度からみて、これはドイツ内部において形成され<sup>38)</sup>、のち東方へ移植されたものといえよう。のちに南フランス、そしてイギリスにも展開した *Basile-Stadt* の方こそ、東ドイツのそれを範としたものと思われる<sup>39)</sup>。

これを要するに E.Keyser が西北ドイツについてのべたマルクトの進化系列は、終りのところに ⊕ 中央マルクト広場を補えば、おおむね全ドイツに関してあてはまるように思われる。すなわち「Markt」タイプの Fernstr., Burg & Kirche

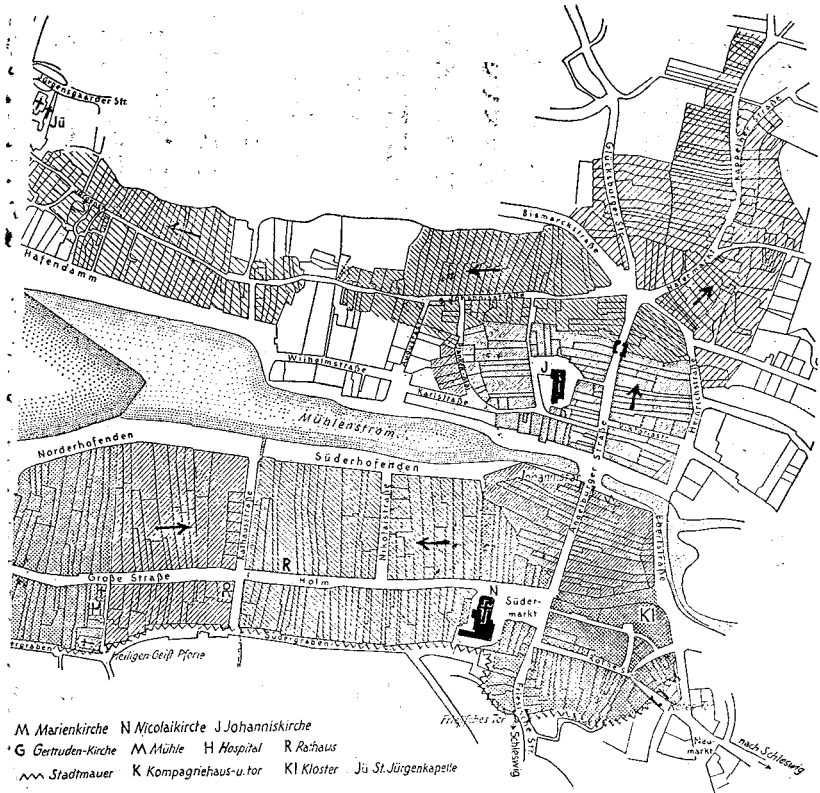


の傍の Marktsäite, Fernstr. に沿って計画的に設けられた Marktplatz, そして最後に Nebenmarkte (9) である。

〔Nebenmarkt ⑧以外の他の広場〕前項末の Nebenmarkt が出てきたが、これまでに述べた Hauptmarkt の他に、地域の拡大あるいは市場機能の分化によって、例えば Altmarkt に対する Neumarkt, あるいは Holzmarkt, Fischmarkt, Pferdemarkt, Kornmarkt などの商品別市場が新設された。ネーベンマルクトの立地は、例えば Hannover の Holzmarkt, Schleswig の Kornmarkt, Husum の Quitmarkt など、いずれも原初的には都市の外縁部にあった。原初的にはというのは、例えば Pferdemarkt もまた Plön (図 50) の Oldelose, Itehoe のような小さな町では、大抵 Landstr. が市門に近づいた地点におかれるが、Libbeck, Stade, Hamburg のようにその後には市域拡大をみた大都市では、新しい時期の城壁内に収められてしまうからである。逆にいえば Pferdemarkt の現在位置は、古い時期の市門の位置を教えてくれるのである。また C.Klaiber が Eslingen の Rossmarkt を例として、右の Pferdemarkt 一般の外縁部位置についてのべながら、一方、ネーベンマルクト広場は、それぞれの業種のツンプトの居住市区におかれるのが通例であったと指摘している点は注目し得る。

第一節冒頭の分類における、(B)すなわちマルクト以外の都市広場としては、まず Kirchplatz があげられるが、これは都市核と密接につながるもので第二節にゆずる。ついで著しいのは市門の前・後における広場であり、多くの場合、これは道路の交会・分岐点にあたっている。

まず市壁外においては、市門直前のものの他に、市門より数百メートルへただった地点、すなわち諸方より当該都市をめざしてきた Landstraßen が交会する位置に設けられた空間がある。これは旅人や車が都市に入る前に、一時滞留するために供されたものであるが、ここにマルクトが成立し、新しい都市核となることもあった(10)。図 4 におい



M Marienkirche N Nicolaikirche J Johanniskirche  
 G Gertruden-Kirche M Mühle H Hospital R Rathaus  
 ~~~ Stadtmauer K Kompagniehaus-u. tor Kl Kloster Ju St. Jürgenkapelle

E. Keyser による)

この Sudmarkt が成立したのは Kappeln, Schleswig, Friesland からの諸街道の交會する、この種の広場であつた。

市門の直前にも Fernstr. が一部拡張されたり、他の Fernstr. や市壁の外側をめぐる小道が交會することによって広場が形成されることが多い。その形態は自然成長的な不整形であるのが一般で、この事例も枚挙に暇がないが、同じく図4で例示すれば、Angelburger Tor の前の五本の道の交會点にみられるのがこの種の広場である。なお、この形態もまた、前記の Pferdemarkt と同じく、市域拡張前の旧い市門の位置を如実に示してくれるのである。例えば Oldenburg における Haarenstr. と Langen Str. の交叉する地点の小さい三角形の空間の

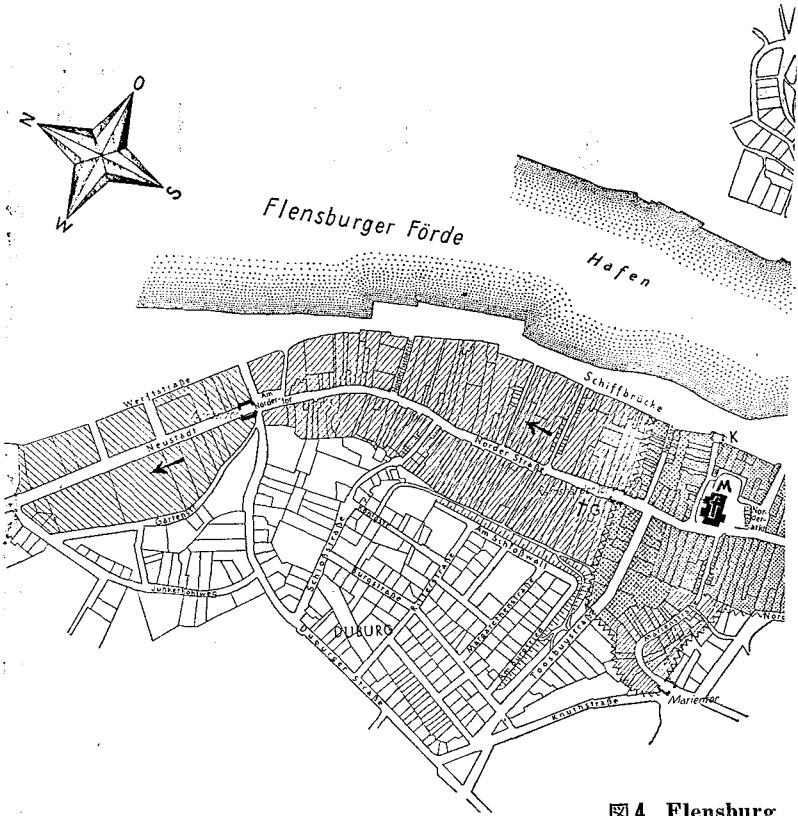


図4 Flensburg

ように。

市門の直後においても、図4のNeuen Nordtor におけるように、駐車のための小さい広場の用意されていることが多い。

要するに市壁に囲われた中世都市には、公園のごときオープン・スペースは皆無であった。Heilbronn でみられるような Baublockinnre にもある Backhausplatz などの Backhaus を延焼から守るための効用をもった空間であり、各家にとって裏庭的な機能を果たす実用的な Allmende であった(4)。

## 二 都市核と Markt との立地関係

「教会とマルクト」 さきに地誌的にローマン・タウンを継承した中世都市の場

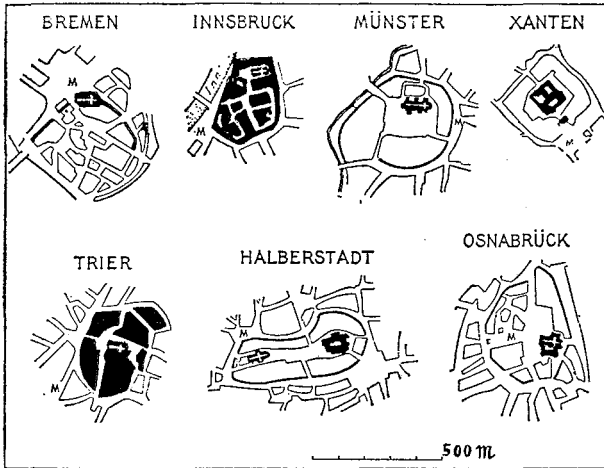


図5 都市核とマルクト (R.E.Dickinson による)

合につき、初期のヴィクおよびのちのマルクトと都市核との関係位置について述べたが、司教都市においては、ローマン・タウンの系譜につながる場合も、ライン以東の司教座新設の場合も、Domfreiheitとヴィクの地誌的三元構造をとったことは、すでによく説かれたところである。図5は R.E.Dickinson が、その代表的なケースを明解に示したものであるが、ここでも Domfreiheit ないし Domburg をとりかこむ道が、多くの場合、Hauptstr. であり、Münster のように、長く Strassenmarkt の形態を維持したのから、Bremen のごとく Liebfrauenkirche の傍の Markstätte がのちにマルクト広場に拡大されたものまで、ほぼ上述のマルクトの進化系列にそう諸類型にあてはめることができる。

Flecken クラスでは、教会の広場がマルクトに供されている例が多く、St.Tonnis b.Krefeld, Heide, Meldorf では、ここにこれが広い(9)。ついにながら中世都市では円形のマルクト広場がほとんど見出せないが、Kirchhof から発達した Kirchplatz は円形であるのが普通である。これについて C.Klaiber は Ringform は一般に防禦的意味をもつとして、教会に付属した Friedhof にも防禦的意味をよみとついている(9)。そして Fritziar を例にあげ、古く unter Friedhof が円形であるのに対し、新しい

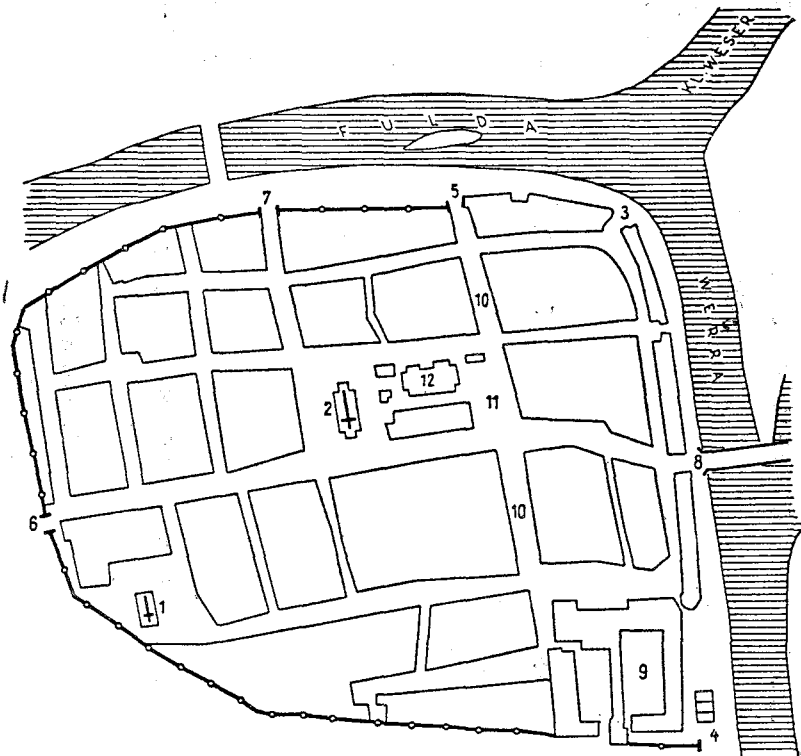
obere Friedhof はすでに方形に近じき、かつ前者と unter Markt、後者と ober Markt との関係から、マルクトの拡張が墓地の空間を制約していったことを説いている。

〔Burg とマルクト〕 司教座とならぶいま一つの有力な都市核は Burg であり、E. Egli の三地域区分のうち、ローマ帝国領に属さなかった、早期のゲルマン人のドイツ地域<sup>47)</sup>、E. Ennen のいわゆる九世紀においてキヴィタスのなかった地域<sup>48)</sup>では、W. Schlesinger のいわゆる germanische Burg が、傑出した都市的集落の晶核であった<sup>49)</sup>。そしてヴィクも単なる商品積換場ではなく、最終的な消費地を求めるものであった以上、国王や Herzog のブルクないし Burgsiedlung を指向して立地したのである<sup>50)</sup>。

もっともすでに前項に Domburg という語がでてきたように、ブルクは俗界の領主のものに限らず、むしろ中世早期においては、世俗のブルクよりもキリスト教関係施設の方が都市核としては一般的であった<sup>51)</sup>。そして十三世紀には聖俗いずれのものであれ、ブルクと Nahmarkt がもっとも普遍的な都市核となっていた<sup>52)</sup>。ブルクの新設はしばしば行なわれ、それはほぼ同時に Stadt を成立せしめた<sup>53)</sup>。

これらの Burgstadt において、Burgberg のまわりをめぐる道がまずマルクトの役割を演ずる段階から、Ball-enstedt のように二本の Langsstraßen を発生させ、そのに Waldeck や Gundersberg のように梯子状の街路網に近じき、やがて Westenburg のように方形ブロック、Marburg のように Gitterform を形成するまでの、街区ないしマルクトの進化系列が認められる<sup>54)</sup>。

このようにブルクが核となった場合、あるいは前記のようにブルクと都市が同時に成立した場合には、マルクト広場は Oldenburg や Stade のようにブルク前の立地を明示するか、あるいは Hann. Münden (図9)、Oldelose,



**HANN. MÜNDEN.** 1 St. Ägidien-Kirche 13. Jh. 2 St. Blasii etwa 1180. 3 Fischpforte. 4 Herrenpforte. 5 Mühlenpforte. 6 Obertor. 7 Tanzwerderpforte. 8 Unteres Tor. 9 Burg. 10 Marktstraße. 11 Markt. 12 Rathaus.

Zwischen 1170 und 1175 Gründung durch Heinrich den Löwen; 1182—85 Durchführung der Gründung durch Landgraf von Thüringen →.

図6 Hann.Münden (H.Planitz による)

Kiel のように Gitternetzの中に予定調和的にブルク、教会、マルクト広場がはめこまれることは第一節で述べたとおりである。図7の Lübeck の「ゴッティモ」稜線上の両端にドームとブルク、そしてその中央にマルクトを配するという空間構成をとっている(55)。

当初、別個の都市核をもつ独立の都市的集落(従ってそれぞれ独自の都市法、教区教会、市壁をしてマルクトをもっていた場合が多い(56))であったもの(合併(Braunschweig と Fle-

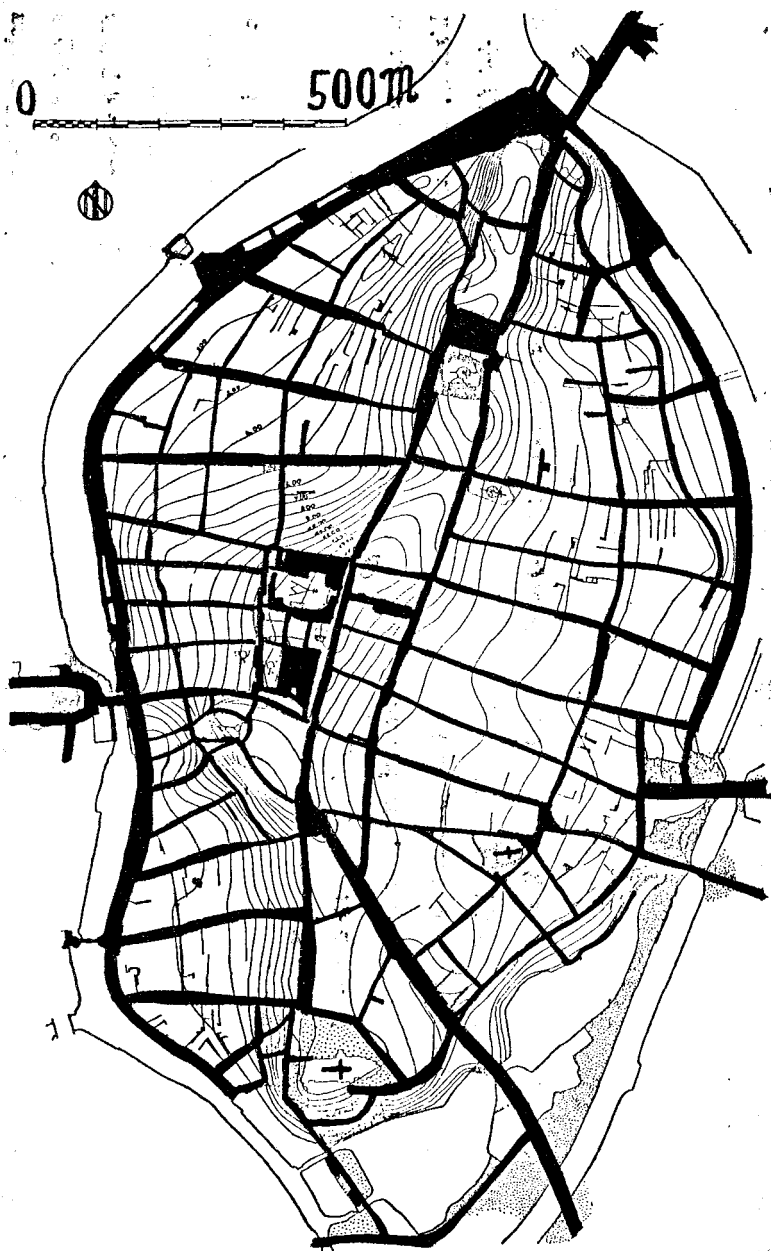


図7 Lübeck (H.Pieper による)

nsburg のことへや、市域の繼起的拡張の行なわれた場合には、市区ごと、あるいは古新の両市区の中間にマルクトが設けられた。例えば Thübingen では教会と Schlobberg とをつなぐの都市核のもとに発達した両定住地の中間に三角形のマルクト広場がみられ<sup>(57)</sup>、同じく Hannover では古く Marksiedlung と新しい Staatsiedlung との間で、Lüneburg では Altstadt と Neustadt との間で、Göttingen では St. Johann のまわりの Marksiedlung と St. Jakob の若く Staatsiedlung との間で<sup>(58)</sup>マルクトがつくられた。Flensburg (図4)は<sup>(59)</sup>Marienkirche のまわりの Kirchflecken、<sup>(60)</sup>前記の Südmarkt のまわりの集落、<sup>(61)</sup>Johanniskirche のまわりの漁民の集落などがそれぞれ図の矢印の方向に成長し、合併した多核都市であるが、今日でも<sup>(62)</sup>、<sup>(63)</sup>に各一つのマルクトがおかれている。より著しい多核都市としては、Braunschweig をあげ得るが<sup>(64)</sup>、各市区に独自の教会とマルクトが、分布する——Dankwarderode (Kohlmarkt と Dom), Altwik (Ägidienmarkt と St. Ägidien), Altstadt (Altstadtmarkt と Martinikirche), Neustadt (Wollmarkt と St. Andreeskirche), Hagen (Hagenmarkt と Katharinenkirche)。

十七世紀以来、ことに十八世紀には諸侯は競って領邦首都の拡張美化をはかるにいたるが、Düsseldorf の Schwanenmarkt, Berlin の Gensdarmenmarkt など<sup>(65)</sup>、拡張部として後述のハロック様式を中心広場が造成された<sup>(66)</sup>。Erlangen などはこの代表例であり、Regensburg (図1)では多くの広場が dezentralierte な市域分化の起動力となつてゐる<sup>(67)</sup>。

さてマルクトと都市核との立地関係は上述のごとくであるが、都市のなかにはマルクト自体が都市核の一つである場合も少なくなく、W. Geisler はこれを関して、Stadt に成長する以前に Flecken, Markt として長い間存立してつたものを Marktstadt と稱してゐる<sup>(68)</sup>が、その Flecken や Markt 自体を成立させた原初的晶核は地方によつ



て様々であるとして、形態の上からみた特異な類型として Bayern 型と Sachsen 型を検出してゐる。前者は街路の屈曲、Sackgassen を主とする中にも幾何学的なプランへの志向が認められ、(Schwabach, Weissenburg, Rezat, Herriden など)、後者は Rundform で不規則的なプランを特色にするという(28)。

### 三 広場と Dominanten の空間的構成

前節までは、都市プラン全体における広場の配置の問題であったが、つぎに広場自体の空間構成を、Rathaus や教会などの öffentliche Gebäude や Dominante の立地と関連付けて考察することにした。

まずラートハウスは Plön (図29) や Segeburg のように、都市の成立にとって、ブルクがマルクトより大きな意味をもったところではブルクの傍に、また Möll や Stade のように教会の傍に牽引される場合もあるが、通常はマルクトに立地する。Göttingen, Hamburg, Flensburg (図4) などは、Altstadt と Neustadt との中間に立地する特異な事例である(29)。

各都市にとってラートハウスより著しい Monumentalbau は、例えば Nördlingen の St. Georgkirch, Danzig の Marienkirche, Ulm の Münster, München の Frauenkirche など Hauptfarkirchen とあつた。大方の都市は一つの都市聖堂区をなしているが、大都市や後期中世に拡張をみた都市では、多くの Pfarrien が増設されている。Köln は一七二二年すでに一三の教区教会を、そして十四世紀末までには、これが二〇に達していたし、Erfurt でもほぼ同数であった(30)。

教区教会はマルクトや Fernstr. 沿いにおかれるのが一般であるが、この際、マルクトと云つても、古い都市では

マルクト広場の中央部に立地したのに対し<sup>(66)</sup>、新しい都市や市区では、広場の一方の側に、とくにそのためのプロツクがリザーヴされるようになった<sup>(67)</sup>(図6)。

広場中央に位置する例は、ドイツではむしろ例外で、Freiburg im B. の Münster, München の Frauenkirche, Jim の Münster などがあげられるが、このような孤立的な立地は、今日でも村の教会が多くそうであるように、かつて墓地を伴っていた名残りである<sup>(68)</sup>。しかし中央位置の場合でも、故意に幾何学的中心からは偏った位置が選ばれている<sup>(69)</sup>。大多数の教会は少くとも自ら広場を囲む四辺の建築群の一部となるか、これに接して建てられている(Mainz, Bamberg, Frankfurt a. Main その他)。これはロシック聖堂そのものが、周囲をせまく建て塞ぎ、側面からの視角を避けて、塔とファサードからの眺めを人々に強いる構造をとっているためである<sup>(70)</sup>。

Braunschweig の Wollmarkt では、広場の二辺をなす長い側面が円錐形の二辺を形成し、Andreaskirche のフロントの部分がこの頂点において広場に突出する形でおかれている<sup>(71)</sup>。教会は、右のように自らのファサードを強調するためのみならず、広場の Geschlossenheit の醸成に自ら広場を幾つかに区切る作用をも演じている<sup>(72)</sup>。例えば Regensburg の大聖堂は、広場をファサードに向う奥行の長い Dompl. と、横の広い Domstr. に分けるべく位置しており(図7)、Braunschweig の Martinkirche も、正面入口の前に奥行のふかい広場、一方、側面には横にひろがりをもつ広場を配し、旧ラートハウスは、他の建築物に隣接しながらも Altstadtmarkt の空間を圧している。こうして二分された広場は方形の織物商館に対しても、その長辺には Altstadtmarkt が横にひろがる空間、短辺には教会の横の広場が奥行のふかい空間として対応しているのである<sup>(73)</sup>(図8)。

Würzburg にあつる Dom へ Neumünsterkirche, Parade Pl. へ St. Kilianspl., Domstr., Bremen にあつる Dom と

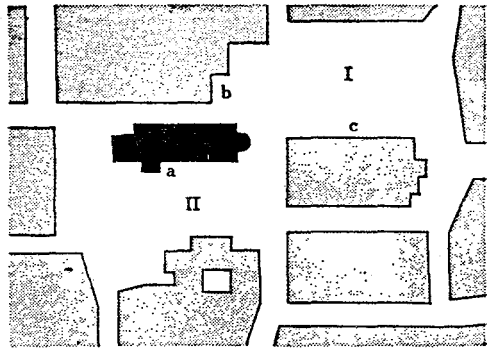


図8 Braunschweig (C. Sitte による)  
I Altstadtmarkt, a Martinikirche  
b 旧ラートハウス, c 織物会館

Liebfrauenkirche, Rathaus と Dompf.; Marktpl. (74) などの空間的配置、Münster の Dompf. をとりまく建築群などには、Monumenten を中心広場に群立させることによって、広場の Geschlossenheit を、かつ都市のシルエットにおける重量感をたかめる効果をあげているのである。

シルエットと云えば、早期の聖堂は大い route centre の高みに建てられたから、Dominanten が一きわ卓越して描かれている Stadtansichten も誇張ではなかったのである。例えば前記の Lübeck の場合、Hafen から稜線上の Hauptstr. に向っていずれのネーベンシュトラッセンを登ってゆくとときも、Dominanten はいつも卓出して観察されたわけである(75) (図7)。このことは、それが異教徒教化の前哨

をも意味した東方植民地域において一そう著しく、多くの聖堂が丘上や川を見下ろす山のはなに立地し、これがエルベ・ザール沿岸の司教座の特色をなしている(76)。この代表的な事例が Meissen である。エルベ左岸の渡河点に発達したこの都市は、市街北端の一四〇メートルの高地にブルクと聖堂が一つの城壁内に収められて Stadtkrone を形成し、ラートハウスと Frauenkirche の立地するマルクト広場(二〇八メートルの台地)がもう一つの都市核をなし、ともに Meissen のプロフィールの力点となっている(77)。しかして平面的にもこの第二の都市核は図9のようにラートハウスと教会と広場が「一つの鑄型」でできたような調和を示す。太線は理念的な Raumbene で、Raumspannung

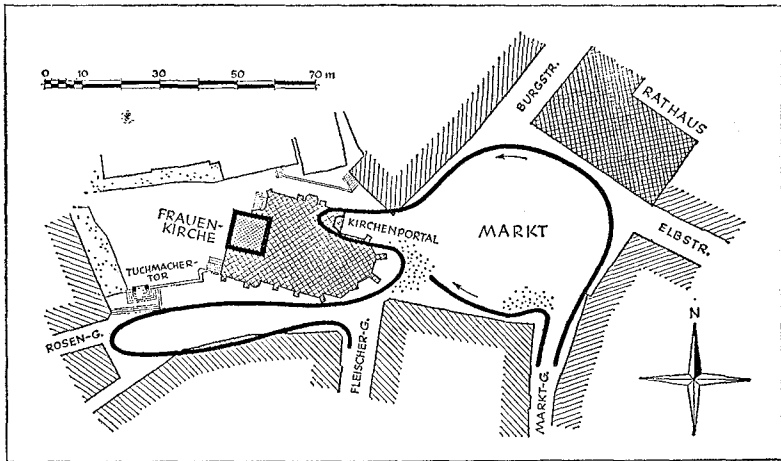


図9 Meissen のマルクト (W.Rauda による)

をあらわしたものであるが、菱形のマルクト広場に入って来た人は、その尖端に位置する Frauenkirche の Chor に、視線を強いられる構造をとっているのである<sup>(28)</sup>。

Goitz もまた一二〇〇年ごろ成立した植民都市で、Neiße川の橋から入る者には河岸に迫った Peterskirche のある Burgberg のみならず、市内の Dominanten が重層をなしてみえる一方、南西隅の Frauentor から入る者にも、Dominanten は遠くからの Blickpunkte であるとともに、歩ともにつぎつぎにあらわれる広場の力点として働く。図10の太線は前図と同じく Raumspannung を示すもので、ラートハウスの塔とともに、Dreifaltigkeitkirche の Nadelturn の垂直線は、Untermarkt にとって遠隔からの作用力点をなしていることを示す<sup>(29)</sup>。同様に図11は、Dresden の Neumarkt の Frauenkirche が、Neumarkt のみならず Altmarkt における視界に及ぼす効果をもねらって配置されたことを示している<sup>(30)</sup>。

このように中世都市の Dominante は、それが立地する広場や街路にとってのみでなく、市中、市外からの遠望にも効果的なプ

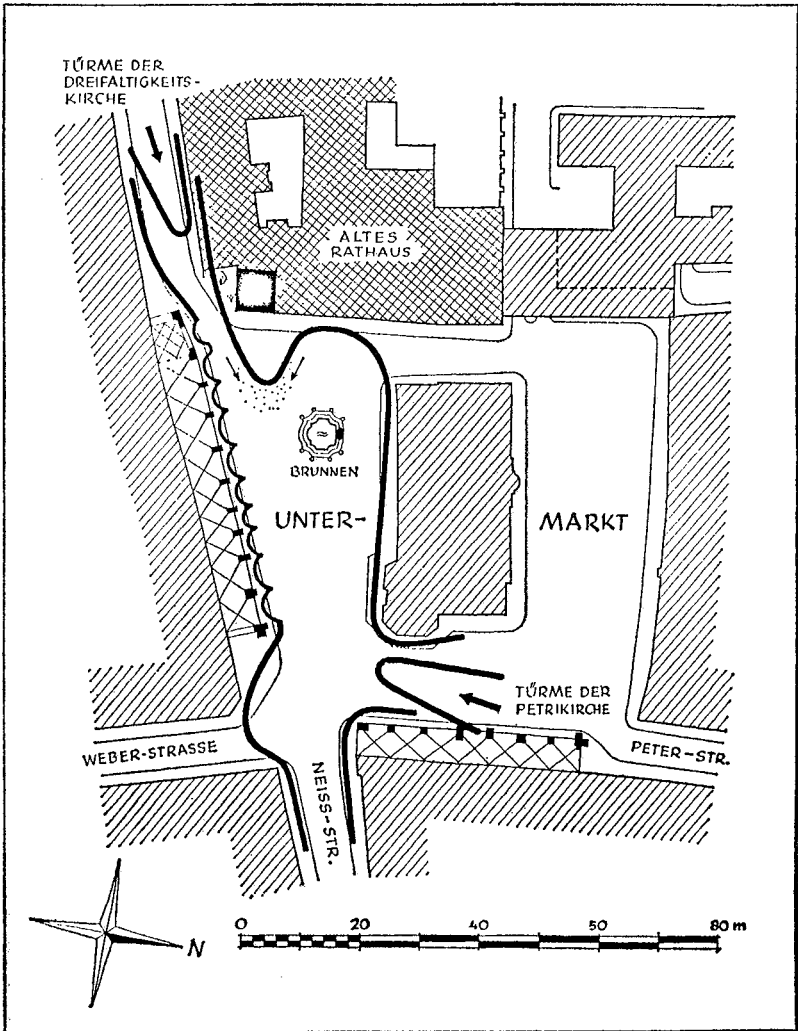
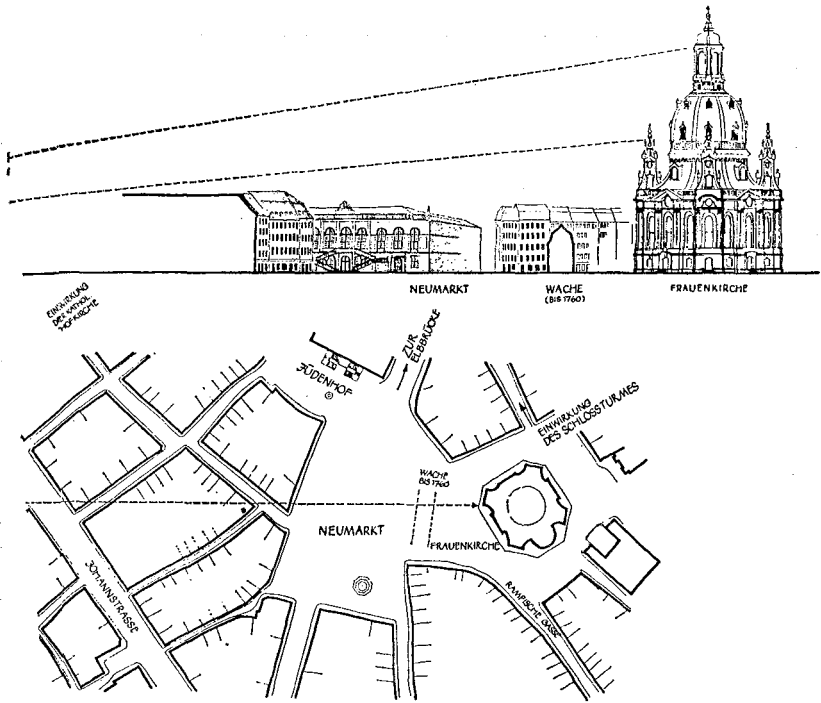


図 10 Görlitz の Untermarkt (W.Rauda による)



(W.Rauda による)

ロフィルを呈示すべく知恵が配されてあった。その底には人間と建築との調和、人間的なスケールVに則った都市プランの原理が働いていたといえるであろう。

人間的V、人工的Vということに關し、いま一つ注目されるのは、上掲の諸図にも明示されているように、広場に入出入する街路が巧みに屈折し、「はてしない道のかなたに視線が消えてゆくことがない(8)」ということ、つまり広場といいながら、視覚的にもきわめて閉された構造をとっていることである。

しかしこのような Geschlossenheitも、方格中央広場プランになってくると崩れだし、やがて Fürsten-

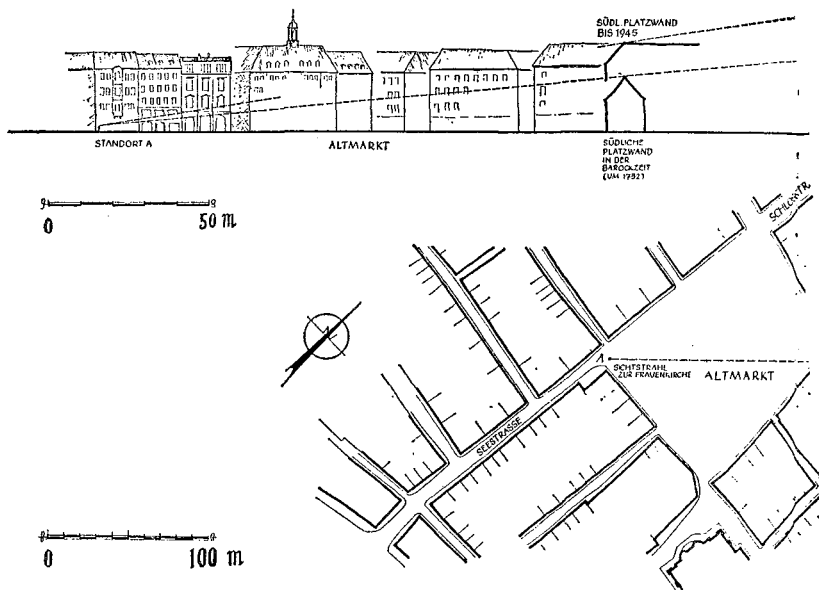


図11 Dresden の Altmarkt と Neumarkt

stadtの経営とともに開放的な広場の展開期を迎える。三方を閉じ、一面だけを人間の視界のためにあけた広場の奥に、ドミナントを据える空間構成は、奥行のふかい舞台としての効用をもつものであった<sup>28)</sup>。Koblenz (図12)や Würzburg (図13)の城館とその広場はこの種の代表的事例である。ルネサンスからバロックへ、広場もまた建築スタイルや都市プランとともに、大きく変貌してゆくのである。これについては節を改めよう。

#### 四 世界都市史におけるヨーロッパ中世都市の広場

〔バロック・プランと広場〕 美術・建築様式が一五二〇年ごろをエポックとして後期ゴシックからルネサンスへと転回したのに伴って、都市プランも *Geschlossenheit*、密度、 $\wedge$ 垂直 $\vee$ の強調から、*symmetrisch-horizontal*な都市空間の創造へ大きく動きはじめる<sup>(83)</sup>。

L. B. Alberti (1475) から V. Scamozzi (1615) にいたるまで陸続と提出されたルネサンス理想都市案に共通する特色は、文字どおり一五〇〇年前の M. Vitruvius<sup>(84)</sup> の再生であり、幾何学的な *grid pattern* 又は *radial pattern* の街

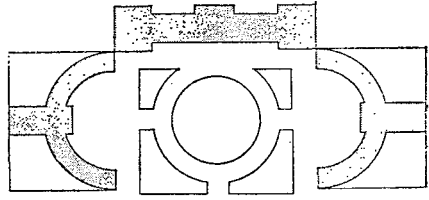


図 12 Koblenz の Residenz の広場  
(C. Sitte による)

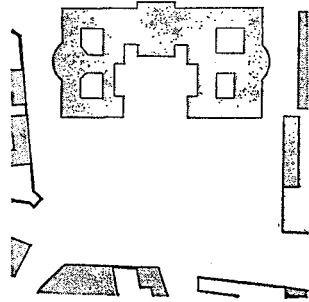


図 13 Würzburg の Residenz の広場  
(C. Sitte による)



路網に整形（多くは星形状）の城郭と広場を八穀と核 $\vee$ としてはめこむところにあった。側堡をもつ星形状稜堡の出現が専ら火炮の発達によることについてはすでに別稿<sup>85</sup>で述べたが、事実、バロック・プランの主要論文の多くは J. Perret などの軍事技術者によって書かれたものであり、バロック体制を支える二つの武器は軍隊と絶対主義国家の官僚機構であった<sup>86</sup>。J. M. Houston が、ルネサンス・プランの重点が軍事的なものであったのに対し、バロック・プランは首都の創・改造で発揮された指摘しているように<sup>87</sup>、前者の実現されたのは Palma Nova をはじめ若干の要塞（都市）にすぎず、フィレンツェやヴェネツィアの宮殿におけるごとく、ルネサンス様式は個々の建物にあらわれることはあっても、都市プラン全般のパターンに変化を与えるものではなかった<sup>88</sup>。L. Mumford が、用語の正しい意味でのルネサンス都市というものはないとしつつ、しかしやがて十七・十八世紀に現実に展開したバロック・プランの端緒としての重大な意義から、これを「原バロック」と名づけている<sup>89</sup>のもこうしたわけからであろう。

ドイツにおいてもイタリア・ルネサンスの建築様式は南部ことに Augsburg や Nürnberg、あるいは北のハンザ都市の建築に大きな影響を及ぼしたが、ルネサンス都市と称すべきものは生じなかった。しかし、やがて絶対主義の Fürstenstadt においてバロック・プランとして貫徹されるのである<sup>90</sup>。その手本となったのが Versailles とパリであることはあまりにも有名である<sup>91</sup>。

ヴィスタを形造る直線街路、その grid または radial な配置とその焦点に配される力づよい中央広場と広場群、そして初期には星形状の囲郭——これらを貫く Perspektiv の原理というのが、バロック・プランの基本パターンであった。そして核はこの「主要広場におくべきである」とした Palladio のいう核とは宮殿、大蔵省、牢獄、精神病院であった——「これほど完全にバロックの新秩序を要約し、政治生活の特色を象徴しているものはないだろう」と

L. Mumford は述べている(83)。

広場も今や Place de Etoile のように rond point の形態が多くとられ、また Place Vendôme, Place des Voges のように統一的なディザインの建物で囲われ、さらには都市全体にわたる建築様式の規制さを行なわれることになった。Mannheim では建物の方位・高さ・階数・階高・奥行・屋根型・ファサードの戸と窓の位置と大きさなどが予め統一的に決められており(83) Crossen a.d. Oder では一七〇八年以後、マルクト広場沿いは三階、Hauptstr. 沿いは二階、市街縁辺部の Gassen では一階という文字通り階層的な高さの統制が行なわれた(84)。

ドイツではこの他、Karlsruhe や Postdam が完全なバロック都市として著名であり、Mainz, Würzburg, Salzburg, Fulda, Münster, Paderborn, Dresden, Stuttgart, Darmstadt, München, Kassel, Bonn, Düsseldorf など聖俗の Fürsten の Residenzstädte が多かれ少なかれバロック的要素を都市プランの上に呈している。

以上のごとく、ルネサンス理想都市案は中世から近世への客観情勢の変化のなかで「短い生命を終わったけれど、その基礎原理は中世都市再開発の基本となり、幾何学的抽象化はプランニング技術を標準化する効果をもった」。そしてつづくバロック都市のプランの「階級的配置の骨組をなす諸施設、主要街路と公共建築の並ぶ広場の構成は、近代都市パターンを形成する基盤(85)」として、ともに世界都市史上に大きな位置づけをもつものであった。

〔広場と他入器官との関わり〕 「広場」を都市の空間構成の主要入器官Vになぞらえる以上、これは当然他の入器官Vすなわち「街路」や「囲郭」や「都市核」とも有機的に関連している(86)。これらが殊に密接に関係し合っただけでなく、統一的な構成をとっているところにバロック・プランのそもそもの特質が存したといえよう。前項において当面の課題たる「広場」のみを抽出して述べることをしなかつた所以であるが、以下にいま一度、他入器官Vそれぞれと

のつながりをとりあげながら、ヨーロッパ都市における広場の変容の意味を検討してみたい。

「都市核」との関連についてはすでに第二節で述べたので、ここではまず「街路」と「広場」との関わりを一瞥しておこう。中世の都市経済からバロックの国家経済への推移は、多様な地方商品から首都の流行に支配された製品のユニフォーム化、職人の注文生産から既製品の陳列販売への移行をもたらし、大きなガラス面をもった商店が街路にならぶようになった。「中世都市のなかでは、上流階級と下層階級とは、寺院のなかでそうであったように、路上でも市場でも肩つきあわせた」が、バロック都市には前者が大型馬車を馳せて買物に出かける直線の大通りが出現し、マルクト広場も車でごった返して、「掛合ったり値切ったりする場所」ではあり得なくなった<sup>(97)</sup>。

要するにヨーロッパ都市においては、広場は大規模な催しのための広場、緑地帯としての公園に変質変容し、少くともそのマルクトとしての機能の大半プラスへつき合いのための空間∨としての機能の多くを街路にゆずったのである<sup>(98)</sup>。

ヨーロッパにおいて街路と広場との関わりがそうであったとすれば、対照的に想起されるのは東洋における都市空間のあり方である。黒川紀章は東洋の都市には広場がなく<sup>(99)</sup>、道がこれを代行していたとの見解を提示している。

黒川はその例として Manasara にみられる古代インドの四つの理想都市案をあげているが、しかし Dandāka 型以外には中央に小規模ながら魔術の広場∨をもつ Nandīyāvarta 型には最外側の城門近くに市場も設けられている。もつとも中央広場といっても agora や forum とは性格を異にし、都市プランの基軸は東西の王道とこれに直交する<sup>マハカウ</sup> 広路とにあり、主要施設もこれに沿って分置されていたが<sup>(100)</sup>。

この古代理想都市案で現実化はされたものはむろん一つとしてなく、現実の土着のインド都市の殆んどは、イス

ラム的要素で塗りつぶされている。その詳細は別稿(頁)にゆずるが、家屋の構造が内庭にのみ開いて外部に向けては閉鎖的であれば、その群集である *Quartire* も閉鎖的であり、街路パターンが *Sackgassen* を示せば、都市そのものも囲郭を施していた。——このようなプランであればこそ、その中にバザールの広場が必要であったのだと云えよう。

日本の場合には、古代都城の大路は「権力のショーウィンドウ」としての広場の代行にすぎなかったとしても、その小路や、中、近世の城下の町屋地区の道は、木造建築の開放性、ことに格子を媒介として、各町家の生活につながっていた(102)。いわば道を媒体として「向う三軒両隣」式の社会関係であったから、アセンブリ・プレーズとしての広場を必要としなかったのである。都市における広場の有無を、 $\wedge$ 市民 $\vee$ の有無に結びつける解釈があるが、この際私は $\wedge$ 市民 $\vee$ という語のなかに含まれた $\wedge$ 都市共同体 $\vee$ の成員という面よりも、それ以前における $\wedge$ 個人 $\vee$ の確立という面を重視したい。家屋構造においても社会関係においても向う三軒両隣式でなく、かつ都市全体も囲郭でかこわれた中世ヨーロッパ都市において、広場が発達したのはむしろ当然であった(103)。

資本主義の発展による「都市の城壁の破壊は現実的でもあり、象徴的でもあった」「こうした変化全体のなかでもっとも顕著なのは、中世都市の具体的な市場が抽象的な国際市場へと代って行ったこと(104)であった。私のいう各 $\wedge$ 器官 $\vee$ はこのような関わり合いのなかにある。ヨーロッパ中世においてマルクト広場が美しい *Geschlossenheit* に貫かれていたころ、家屋・街路の構造も閉鎖的であり、都市自体も囲郭によって閉ざされていた。囲われた空間のなかでこそ、広場は必要なのであり、また広場自体、元来閉ざされていないければ広場ではあり得ないのである。人は誰も無限の広野に立って、そこに広場があるとは云わない。

注

- (1) G. Schwarz : Allgemeine Siedlungsgeographie. 1961, S. 445
- (2) R. Gradmann : Die städtischen Siedlungen des Königreichs Württemberg. 1914
- (3) H. Dörries : Entstehung und Formenbildung der niedersächsischen Stadt. Forsch. z. deutschen Landes- u. Volkskunde. 1929
- (4) H. Planitz : Die deutsche Stadt im Mittelalter. 1954, S. 164-165
- (5) 宮下孝吉 : 西洋中世都市発達の諸問題 昭三四 pp. 30-31, なおローマン・タウンのプランやそのフォーラムについては例えは藤岡謙二郎 : 都市文明の源流と系譜 昭四四 第四章に詳しい。
- (6) 岡野光一 : 欧風都市のメンクト・プランの沿革的考察及び食料品市場並に中央広場に就いて 地学雑誌 三七巻 p. 169
- (7) 同右 p. 172
- (8) H. Eiden : Die spätrömische Kaiserresidenz Trier im Lichte neuer Ausgrabungen. Trier, Ein Zentrum Abendländischer Kultur. 1952, S. 7-26
- (9) とりあえずは人文地理学会第八〇回例会発表「ドイツ中世都市の空間構成——核と殻の間」(要旨 人文地理二二一) 参照。
- (10) 岡野 : 前掲注(9) p. 175
- (11) E. Egli : Geschichte des Siedlehauses. Bb. II, 1962, S. 119
- (12) H. Keussen : Topographie der Stadt Köln im Mittelalter. Bd. I, 1910, S. 33-41
- (13) H. Planitz : *ibid.*, S. 192-193, E. A. Gutkind : Urban Development in Central Europe. 1964, pp. 164-165, P. Schöller : Die deutsche Städte. 1967, S. 35
- (14) E. Keyser : Städtegründungen und Städtebau in Nordwestdeutschland in Mittelalter. 1958, S. 262
- (15) E. A. Gutkind : *ibid.*, p. 164, なおローマン市場については宮下孝吉 : ヨーロッパにおける都市の成立 昭

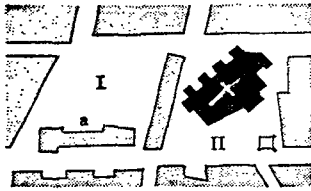
二八 に詳細なる研究が収められている。

- (16) P. Schöller : *ibid.*, S. 35
- (17) R. Martiny : *Die Grundrißgestaltung der Deutschen Siedlungen. 1928* (綿貫勇彦訳 昭一〇 p. 62)
- (18) R. マルクトニー : 前掲注(17) p. 91
- (19) 同右 p. 95
- なお、C. Klarber : *Die Grundrißgestaltung der deutschen Stadt im Mittelalter. 1912* には Marktstr. より發展したものと含めて、マルクト広場に三角形および方形の二つの基本型を見出し、後者をならびに後述の並行街路の間にはめられた場合に近い型と Hauptstr. の傍に添えられた型とに分かっている。また前者の場合、三角形の頂点をなす位置にモニュメントがおかれていることを指摘している (S. 10)。
- (20) G. Schwarz : *ibid.*, S. 445
- (21) マルクトの拡張に際しては、共同墓地の地積を転用する場合が多かった。例えば Baden の Bruchsal (1200)、あるいは Braunschweig の新市区 (十三世紀末) など (E. A. Gutkind : *ibid.*, p. 164)。なお後述の Fritziar の場合を参照された。
- (22) H. Planitz : *ibid.*, S. 190-191, 方形が最も一般的であったが、三角形のマルクトも十三・十四世紀には珍しくなく、これと Sachsen, Thüringen, 植民地地域の建設都市において多くみられた。三角形の広場は二本の Hauptstr. の交差点をマルクトとする場合とできる (R. E. Dickinson : *ibid.*, p. 325)。なお、C. Klarber は、中世都市においては多角形ならびに丸形のマルクトが見出されない点に注目してこそが (*ibid.*, S. 13), Planitz は、円形や方形のマルクトの例としてあげている (S. 191)。
- (23) 他に網状・放射状街路などをあげている (前掲注(17) pp. 78-83)。
- (24) 同右 p. 96
- (25) E. Keyser : *ibid.*, S. 262
- (26) E. A. Gutkind : *ibid.*, p. 165

- (27) G. Schwarz : *ibid.*, S. 446
- (28) H. Plantz : *ibid.*, S. 191
- (29) *Ibid.*, S. 193, E. Keyser : *ibid.*, S. 263
- (30) z. B. Leipzig
- (31) R・ペルトマニール：前掲注(17) p. 100
- (32) H. Plantz : *ibid.*, S. 193
- (33) P. Schöller : *ibid.*, S. 35, 周縁の農村から四辺の市門を経て平等に近づき易くするため、中央にマルクト広場を求めたのだと解めよう (R. E. Dickinson : *ibid.*, p. 324)。
- (34) G. Schwarz : *ibid.*, S. 447
- (35) H. Plantz : *ibid.*, S. 194
- (36) P. Schöller : *ibid.*, S. 35 これは概括的な分類であって、さらに各地方についてみれば細区分されることはいうまでもない。例として K. Ulbrich : *Städte und Märkte in Kärnten, Mitt. Geogr. Gesells. in Wien, Jg. 82, Nr. 7-8, S. 193-222* ではケルンテン地方のドイツ植民都市のマルクトの形態を *Strabenplatz* をもつものと、およびこれが街路の交叉点に位置するもの *Rechteckplatz* をもつもの *Strabenmarkt* に四区分している。
- (37) H. Plantz : *ibid.*, S. 193, R・ペルトマニール：前掲注(17) p. 108
- (38) R・ペルトマニール：前掲(17) p. 109, R. E. Dickinson もこのプランは突然あらわれたのではなく、二〜三〇〇年間の実験のプロセスを経た成果だとしている (*Ibid.*, p. 324)。
- (39) 詳しくは「街路」を扱う別稿に譲る。とりあえず日本地理学会一九六九年春季大会発表の「ドイツ中世都市の街路ならびに街区のつくり」(要旨 地評四二二)参照。なお A. Korn : *History builds the Town. 1967* (星野 芳久訳 昭四三 p. 122 以下) にも簡単にふれられている。
- (40) E. Keyser : *ibid.*, S. 264
- (41) *Ibid.*, S. 264

- (42) C. Klarber : *ibid.*, S. 16  
 (43) E. Keyser : *ibid.*, S. 253  
 (44) C. Klarber : *ibid.*, S. 17  
 (45) R・ヤントベリー : 通覽社(二) p. 59  
 (46) C. Klarber : *ibid.*, S. 13  
 (47) E. Egli : *ibid.*, S. 106  
 (48) E. Emmen : Frühgeschichte der europäischen Stadt. 1953, S. 298-300  
 (49) W. Schlesinger : Über mitteleuropäischen Städtelandschaften der Frühzeit. Bl.f. deutsch. Landessgesch., 1957 S. 17  
 (50) 維ノヘダ別譯ヲ觀ル。社(㊦) 參照。  
 (51) R. E. Dickinson : *ibid.*, p. 369  
 (52) H. Planitz : *ibid.*, S. 164  
 (53) 德ノミナカノ市ノ名ノハナハナクシテ Graf ㊦ Amtsgut ㊦ ㊦ ㊦ Ravensburg ㊦ 1000 ㊦ ㊦ Welfen ㊦ 所有ニシテ ㊦ 1113 ㊦ ㊦ ㊦ Marktlecken' ㊦ ㊦ 1111 ㊦ ㊦ ㊦ Stadt ㊦ ㊦ ㊦ (Ibid., S. 165)。  
 (54) W. Geisler : Die deutsche Stadt, eine Beitrag zur Morphologie der Kulturlandschaft. 1924, S. 76  
 (55) H. Pieper : Lübeck, städtebauliche Studien zum Wiederaufbau einer historischen deutschen Stadt. 1946, S. 17-21  
 (56) W. Geisler : *ibid.*, S. 59  
 (57) H. Saalman : Medieval Cities. 1968, pp. 32-34, K. Weidle : Die Entstehung von Alt-Tübingen. 1955, S. 29-33  
 (58) E. Keyser : *ibid.*, S. 263  
 (59) 維ノヘダ別譯。社(㊦) 參照。  
 (60) 國誌 : 通覽社(㊦) pp. 179-180  
 (61) P. Schöller : *ibid.*, S. 35





Kiel の Nicolaikirche と  
ラートハウス (a)

- (32) R. E. Dickinson のよび Marktstadt を未だ town に達しない段階の market settlement としている場合もあり (ibid., p. 312), そのような際は Marktstadt は Flecken と同義となる。
- (33) W. Geiser : ibid., S. 82-83
- (34) E. Keeser : ibid., S. 266
- (35) その他 Magdeburg 11, Braunschw. 9, Braunschweig, Münster, Regensburg, Schleswig, Ebingen はいずれも七 (H. Planitz : ibid., S. 227)。
- (36) L. Mumford : The City in History. 1961 (生田 勉訳 昭四四 p. 276) では、むしろ人が繁々と集ったところが聖堂であったので、その近くに市場が設けられたのだとしている。
- (37) R. E. Dickinson : ibid., p. 325
- (38) これのちに郊外に移されたのは衛生上の理由からである (Ibid., p. 326)。
- (39) 例えは建設都市 Kiel において計画的に設けられた方形の広場の中にありながら、Nicolaikirche は斜めに広場を横切る恰好で建てられている (左図参照)。
- (70) C. Site : Der Städtebau nach seinen künstlerischen Grundsätzen. 1901 (大石 敏雄訳) 昭四三 pp. 83-84
- (71) K. Junghanns : Die öffentlichen Gebäude im mittelalterlichen deutschen Stadtbild. 1956, S. 42
- (72) 広場が不整形なのは「周囲の建物の要求が先ずでてきて、空地の配列を決定づけたから」である (L・マンフォード : 前掲注(66) p. 276)
- (73) C・ジッテ : 前掲注(70) p. 86
- (74) この種の広場構成に対して Gruppe Platz の称がある (杉村暢二 : ヨーロッパとその植民地の都市と広場 Lotus 第二号 立正大学教養部 p. 130)。
- (75) K. Junghanns : ibid., S. 15-19

- (76) ちのち東すると、要害地を占めたブルクと聖堂が一つの城壁の中に収められて支配と侵略のシンボルをなしている。  
Prague の Hradcany などの典型 (R. E. Dickinson : *ibid.*, p. 329)。
- (77) K. Jungmanns : *ibid.*, S. 51-54. W. Radig : Die Siedlungstypen in Deutschland und ihre frühgeschichtlichen Wurzeln. 1955, S. 139-142
- (78) W. Rauda : Lebendige Städtebauliche Raumbildung, Asymmetrie und Rhythmus in der deutschen Stadt. 1957, S. 190-192
- (79) *Ibid.*, S. 312-323, K. Jungmanns : *ibid.*, S. 13-14
- (80) W. Rauda : *ibid.*, S. 238-242
- (81) C. シムチ : 前掲注(2) p. 87
- (82) 同右 p. 92
- (83) P. Shöller : *ibid.*, S. 36
- (84) M. Vitruvius : De architectura libri decem (森田慶一訳 昭四四)。ついでながらスペインの植民都市の場合は、ハロミタの移植とじつは、より直接に Vitruvius に遡るものであり、これはロミチック要素、ペルシアンラブ的要素が重なったスペイン独自のプランであった。Patio に向って開き、外部に向っては封鎖的な家屋、grid pattern の中央部ブロック Plaza をはめ、それを聖堂、政庁舎、学校などの公共施設となり囲む空間構成 (H. Wilhelmly : Die Spanische kolonialstadt in Südamerika, Gründunge ihrer baulichen Gestaltung. Geographia Helvetica, 5Jg., 1950, S. 24, 29-31) では、ヨーロッパ中世都市、イスラム都市にみられた Geschlossenheit と Vitruvius 的要素との結びつきがわがわかれる。
- (85) 矢守 : 都市囲郭の成立、変容、消滅について 人文地理二二—三
- (86) L・マンフォード : 前掲注(8) p. 330, p. 314
- (87) J. M. Houston : A Social Geography of Europe. 1953, p. 180
- (88) A・ヒーン : 前掲注(8) p. 146

- (89) L・マンフォード：前掲注(66) p.304, p.306
- (90) P. Scholler : *ibid.*, S.36
- (91) 例えばA・ローン：前掲注(39) p.153, パリについては手近かなところで川添登：都市と文明 昭四〇 pp.273-282
- (92) L・マンフォード：前掲注(99) p.335
- (93) E. A. Gutkind : *Twilight of Cities.* 1962 (日笠 端監訳 昭四一 p.29)
- (94) P. Scholler : *ibid.*, S.38
- (95) 伊藤鄭爾：西洋都市史 建築学大系二 昭三五 pp.79-80
- (96) 矢守：都市形態の歴史地理的研究序説——ヨーロッパ中世都市を中心に 人文地理 一七—四 pp.68-70, 矢守：都市 囲郭の変容系列に関する覚書 人文地理 二一—一 p.64
- (97) L. Mumford : *The Culture of Cities.* 1938 (生田勉 森田茂介訳 昭三〇 pp.114-117)
- (98) もともと住宅区のみなにも十七世紀以降、Open square という階級的集団居住に奉仕する新しい空間が生れた(マンフォード：前掲注(66) p.336)。
- (99) G. Schwarz も中国の都市には広場がないことをその特色の一つにしてゐる (*Ibid.*, S.429)。なるほど、古代の都城プランの中には市場が画定されており、例えば前漢長安の場合、その九市の面積は各々方二六六歩であったとされるが(服部克彦：古代中国の都市とその周辺 昭四一 p.188)、古代都城の「市」なるものは、坊の中は曲衢に沿う肆で充填されており、オープンス・ベースとはいえないと思う。唐末より坊制も乱れ、諸都市の市場活動が立地したのは廟の前や街路となつたようである。例えば宋代明州の大都市は城内中央部の能仁寺前におかれ、市廊が設けられていた。また慈溪県では唐開元二六年(七三八)に県治の直前に南に走る七丈の大街がつくられ、これに肆が配された(斯波義信：宋代明州の都市化と地域開発 待兼山論叢 第三号 大阪大学文学部)。なお、脱稿後、中国の市場については斯波氏より多くの御教示を得たので次の機会に補訂を加えた。
- (100) 黒川紀章：都市デザイン 昭四〇 pp.124-125, G. Schwarz : *ibid.*, S.437
- (101) 矢守：前掲注(85)

- (102) 黒川…前掲注(100) p. 126
- (103) 山口恵一郎…都市地域形成の世界史的系列における日本の特質 歴史地理学紀要 四 でも、私が先稿以来、都市圏郭、広場など都市プランの面から捉えようとしてきた世界都市史における地域類型が追求されている。
- (104) L・マンフォード…前掲注(66) pp. 346-348